話をしています。お寺の考え方も含めて、なぜそのかたち、配置、彫刻なのかなどを説明します」と山下社長。お客様の立場になると、誰にも聞けない、先祖代々のお墓のとても大切な部分を伝えられた想いだ。「当たり前のことだよ」と笑顔を交えるが、石材店の仕事の意味の大きさに改めて気付かされる。代替わりしても、お墓への愛着、お寺への理解や信仰が深まるのではないだろうか。

明王院墓地。和型でも正面頂部に梵字を彫るなど、お寺の教えに即している

さて、同社のある鴨方は、古くは良質な花崗岩が産出された地域で、特に明治・大正・昭和初期には石材採掘・加工が盛んな地域だったという。同社はもともと加工専門として創業し、いまも自社工場で、原石から墓石などの各種石製品を生産している。石種は、庵治石、大島石、青木石、矢掛石（白）などの国産材がメインで、外材・中国製品の扱いは全体の三％程度。昭和初期まで石材を採掘していた丁場の跡地を買い受け、石を身近に感じながら、心を込めてお墓をつくっている。

「五輪塔の水輪などの丸もの以外は、蓮華も含めて、すべて自社で加工できます。工場を続けているのは、意地かな（笑）。こだわりは特にないけれど、工場は死なせたくないと思っています。山があって、工場があって、自分たち石屋が生きているわけだから、自分も〝生きた工場〟を残さなければいけないと頑張っているだけ」と山下社長は話す。

それでも、ほとんどのお客様は紹介や口コミ、または代々のお付き合いのあるお客様で、「山